

古今和歌集

こころがすこい、おもしろい

石川 恵悟

〈第一部〉

- 一. 正岡子規の批判
- 二. 古今和歌集の基礎知識

〈第二部〉

- 一. 誹諧歌
- 二. 表現技法「掛詞・物名」
- 三. 君が代原歌
- 四. 配列の妙

〈第三部〉

- 一. 仮名序が語る和歌論・日本人の心
- 二. 萬葉集と古今和歌集

※読みやすさに配慮し、和歌は五七五七七で区切り、適度に漢字を用いた。



うたあわせ
歌合

〈第一部〉

一・正岡子規の批判

「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。」

「先づ『古今集』といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。」

正岡子規『歌よみに与ふる書』

年のうちに春は来にけり ひととせ 一年を こぞ 去年とやいはむ 今年とや
いはむ (一番 在原元方)

二・古今和歌集の基礎知識

- ・我が国最初の勅撰和歌集（醍醐天皇）、
- ・編者は紀友則、紀貫之、おおしこうちのみつね 凡河内躬恒、みぶのただみね 壬生忠岑
- ・平安時代前期の成立（九〇五年か）
- ・全二〇巻、一一一一首
- ・かな文字、たをやめぶり
- ・国風文化の象徴的存在

紀貫之



古今和歌集の構成

仮名序

卷第一	春歌上	卷第十一	恋歌一
卷第二	春歌下	卷第十二	恋歌二
卷第三	夏歌	卷第十三	恋歌三
卷第四	秋歌上	卷第十四	恋歌四
卷第五	秋歌下	卷第十五	恋歌五
卷第六	冬歌	卷第十六	哀傷歌
卷第七	賀歌	卷第十七	雑歌上
卷第八	離別歌	卷第十八	雑歌下
卷第九	羈旅歌	卷第十九	雑体(長歌・旋頭歌・誹諧歌)
卷第十	物名	卷第二十	大歌所御歌・神遊びの歌・東歌

墨減歌

真名序

〈第二部〉

一・誹諧歌

A () () ども () () ずとのみ 言ふなれば いなや ()

() じ () () かひなし (一〇三九番 よみ人しらず)

B 我を（ ） 人を（ ）ぬ おくいにや 我が（ ）
人の 我を（ ）ぬ （一〇四一番 よみ人しらず）

二. 表現技法 「掛詞・物名」

もののな



A 山里は 冬ぞさびしさ まさりける 人目も草も かれぬ
と思へば （三一五番 源宗于朝臣）
むねゆき あそん

B 冬川の 上はこほれる 我なれや 下に流れて 恋ひ渡る
らむ （五九一番 宗岳大頼）
むねをかのおほより

C 来べきほど 時すぎぬれや 待ちわびて 鳴くなる声の
人をとよむる （四二三番 藤原敏行朝臣）
あそん

D いささめに 時待つまにぞ 日は経ぬる 心ばせをば 人
に見えつつ （四五四番 紀乳母）
きのめのと

E 花の中 目にあくやとて 分けゆけば 心ぞともに 散り
ぬべらなる （四六八番 僧正聖宝）

三. 君が代原歌

A わがきみは ちよにやちよに さざれいしの いはほとなりて
こけのおすまで (三四三番 よみ人しらず)



B わが君は 千代にまませ さざれ石の いはをとなりて
苔むすまでに



C わが君は 千代にまませ さざれ石の いはほとなりて
苔のおすまで



D わが君は 千代に八千代に さざれ石の いはほとなりて
苔のおすまで



E 君が代は 千代に八千代に さざれ石の
いはほとなりて 苔のおすまで

君が代 詞 古今和歌集 作曲 林 広守

きみが - よ - は ちよに - -
やちよに さざれ いしの いわおと
なりて こけの む - す - ま - で

(注) 原歌の作者は未詳。『古今和歌集おんみやうさくしやのしだい隠名作者次第』には橘清友(橘諸兄の孫、橘奈良麻呂の子)とある。

本ページは久曾神昇『古今和歌集(二)』を基に作成。

四・配列の妙

卷第十一〜十五の歌は、ほぼ恋の展開に沿って配列

- ・恋歌一・二…恋がまだ胸中にある段階の煩悶
- ・恋歌三・四…会話を交わすようになった後の展開
- ・恋歌五…高潮期を過ぎた後の懐疑、断念、回想



A ほととぎす 鳴くや五月の あやめ草 あやめも知らぬ

恋もするかな (恋歌一 四六九番 よみ人しらず)

B 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚

めざらましを (恋歌二 五五二番 小野小町)

C 秋の野に 笹分けし朝の 袖よりも あはで来し夜ぞ ひ

ちまさりける (恋歌三 六二二番 業平朝臣)

D みるめなき 我が身を浦と 知らねばや かれなで海人の足

たゆくくる (恋歌三 六二三番 小野小町)

E 月やあらぬ 春や昔の 春ならぬ 我が身ひとつは もとの身

にして (恋歌五 七四七番 在原業平朝臣)

F 時すぎて かれゆく小野の 浅茅あさちには 今は思ひぞ 絶え
ず燃えける
(恋歌五 七九〇番 小町こまち姉あね)

G 色見えで うつろふものは 世の中の 人の心の 花にぞ
ありける
(恋歌五 七九七番 小町)

卷第一く六の歌は 立春から歳暮までの一年の流れに沿って配列

←

春歌上・下の四九く八九番は 桜を題材にした歌



A 今年より 春知りそむる 桜花 散るといふことは な
らはざらなむ
(春歌上 四九番 貫之)

B 世の中に たえて桜の なかりせば 春の心は のどけか
らまし
(春歌上 五三番 在原業平朝臣)

C 花ざかりに京を見やりてよめる
見わたせば 柳桜を こきまぜて みやこぞ春の 錦なり
ける
(春歌上 五六番 素性そせい法師)

D 春霞 たなびく山の 桜花 うつろはむとや 色かはりゆく
(春歌下 六九番 よみ人しらず)

E 桜花 散らば散らなむ 散らずとて ふるさと人の 来て
も見なくに
(春歌下 七四番 惟喬親王)
これたかのみこ

F 桜の花の散りけるをよみける



ことならば 咲かずやはあらぬ 桜花 見る我さへに 静しづ
心なし
(春歌下 八二番 貫之)

G ひさかたの 光のどけき 春の日に 静しづ心なく 花の散る
らむ
(春歌下 八四番 紀友則)

H 春雨の 降るは涙か 桜花 散るを惜しまぬ 人しなければ
(春歌下 八八番 大伴黒主)

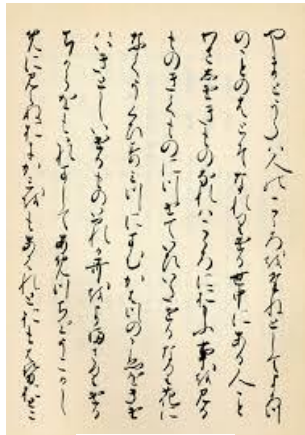
I 桜花 散りぬる風の なごりには 水なき空に 浪ぞたち
ける
(春歌下 八九番 貫之)

〈第三部〉

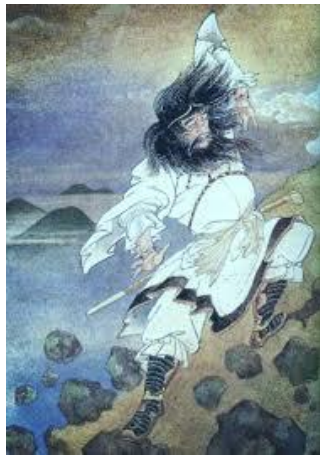
一・仮名序が語る和歌論・日本人の心

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事・業わざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり。

花に鳴くうぐひす、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛きもの心の心をもなぐさむるは歌なり。



仮名序



素戔嗚尊

この歌、天地の開け始まりける時よりいできにけり。

あらがねの地にしては、すさのをの命よりぞおこりける。ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、すなほにして、言の心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ、三十文字あまり一文字はよみける。

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごめに 八重垣作る その八重垣を

たとひ時移り、事去り、楽しび哀しびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸絶えず、松の葉のちり失せずして、まさきのかづら長く伝はり、鳥のあと久しくとどまれらば、歌の様をも知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくにいにしへを仰ぎて、今をこひざらめかも。

二．萬葉集と古今和歌集

萬葉集の最後の歌

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重しけ吉事よしく

(四五二六番 大伴家持)

古今和歌集の最初の歌

年のうちに春は来にけり ひととせ 一年をこぞとやいはむ 今年

とやいはむ (一番 在原元方)

古今和歌集の最後の歌

ちはやぶる 賀茂のやしらの 姫小松 よろづ世経ふとも

色はかはらじ (一一二二番 藤原敏行)



〔参考文献〕

- 阿部正路 『万葉と古今をつなぐ』 (泉書房) 1987
- 奥村恆哉校注 『新潮日本古典集成 古今和歌集』 (新潮社) 1978
- 尾崎左永子 『尾崎左永子の古今和歌集—新古今和歌集』 (集英社) 1987
- 織田正吉 『古今和歌集』の謎を解く』 (講談社) 2000
- 川村晃生 『日本の文学 古典編 古今和歌集』 (ほるぷ出版) 1986
- 久曾神昇編 『古今和歌集(一)〜(四)』 (講談社学術文庫) 1979〜1983
- 久曾神昇編 『伊達本 古今和歌集 藤原定家筆』 (笠間文庫) 2005
- 小島憲之他校注 『新日本古典文学大系 古今和歌集』 (岩波書店) 1989
- 小町谷照彦・田久保英夫 『古今和歌集』 (新潮社) 1991
- 小松英雄 『やまとうた 古今和歌集の言語ゲーム』 (講談社) 1994
- 佐伯梅友校注 『古今和歌集』 (岩波文庫) 1981
- 佐々木隆 『古今和歌集入門 ことばと謎』 (国書刊行会) 2006
- 鈴木日出男 『古代和歌の世界』 (ちくま新書) 1999
- 高階秀爾 『日本人にとって美しさとは何か』 (筑摩書房) 2015
- 高田祐彦訳注 『古今和歌集』 (角川ソフィア文庫) 2009
- 谷知子 『天皇たちの和歌』 (角川選書) 2008
- 谷知子 『和歌文学の基礎知識』 (角川選書) 2006
- 谷山茂他編 『新訂国語総覧』 (京都書房) 2001
- 中島輝賢編 『ビギナーズ・クラシックス 古今和歌集』 (角川文庫) 2007
- 正岡子規 『歌よみに与ふる書』 (岩波文庫) 1955
- 真下三郎・饗庭孝男監 『新編日本文学史』 (第一学習社) 2005
- 渡部泰明編 『和歌とは何か』 (岩波新書) 2009
- 渡部泰明編 『和歌のルール』 (笠間書院) 2014

〈ご参考〉

A やまざとはふゆぞさびしさまさりけるひとめもくさもかれ
ぬとおもへば

B ふゆかわのうへはこほれるわれなれやしたになかれてこひ
わたるらむ

C くべきほどときすぎぬれやまちわびてなくなるこそひのひと
をとよむる

D いささめにときまつまにぞひはへぬるころばせをばひと
にみえつつ

E はをはじめ、るをはてにて、ながめをかけて、
時のうたよめ、と人のいひければよみける

はなのなかめにあくやとてわけゆけばこころぞともにちり
ぬべらなる